

農村生活体験が都市の子どもに与える影響について

— 茨城県久慈郡里見村の体験教室を事例として —

生活体験・生活態度・生活習慣

宮下桂治 (順天堂大学)

木村博人 (順天堂大学
大学院研究生)

I はじめに

近年、科学技術の進歩や都市化現象に伴い生活環境が大きく変化し、また受験や学歴偏重による過酷な塾通いや、睡眠不足、校内暴力やいじめの問題等、様々な「ひずみ」がみられるようになってきた。

この様な現状を打開し、子どもたちを健全な方向へ導く方法はないものか。その方法論を実践活動を通して明らかにしようと考えたのが本研究の目的である。

すでに松本等は青少年に「都市と農村の交流」を提唱し、農家に分宿して農村生活を体験させようとしている。⁴⁾

これは、子どもたちの生活態度を育てるために、種々の生活体験を通して教育することが重要であると考えているからである。

ピーター・セベリヌスは「息子たちよ、さあ、本を焼いてしまいなさい。丈夫な靴を買って山へ出かけなさい。谷を、砂漠を、海岸をそして地球の一番奥深くまで探索しなさい¹⁾」と現代の教育の在り方を正す言葉を述べている。つまり知識の教育だけではなく人間教育への基本的な考えを明らかにしている点では注目すべきである。つまり四方を壁に囲まれた教育だけが教育の場ではなく、自然の中の方がのびのびとより具体的に教育できることを主張し、人間教育を教室以外に求めている。つまり、現代の学校教育はあまりにも膨張しすぎて、²⁾、³⁾人間教育が軽視されているが、これまでの教育の伝統を現代の状況の中で見直し、質的変換を考えるべきである。

以上の様に子どもたちの人間教育の立場で考えれば、子どもたちを農村に連れ出し、農家に分宿し、農村生活体験をさせる機会を提供することにより、生活態度を育てることができないかと考えた。

II 研究の目的

子どもたちに日常生活と異なる農村生活を体験させることにより、生活や態度に変化を与えるのではないかと考え、農村生活体験が子どもたちに与える影響を明らかにする。

III 調査の方法

表1 参加者の学年・性別

学年	男子	女子	計
4	11	3	14
5	9	13	22
6	13	11	24
計	33	27	60

1. 調査の対象者

- a) 参加者 60名
- b) 保護者 60名
- c) 受け入れ農家 19軒

2. 生活体験地域及び民家の概要

a) 里美村の概要

茨城県久慈郡里美村は、東から北に約40Kmにわたる県下最大の面積を持つ村で、人口は5,205名(昭和58年)で、村の中央を久慈川の支流である里川が細長く流れ、山林面積が村の82%を占める自然に恵まれた村である。

b) 受け入れ農家

受け入れ農家は酪農、林業、しいたけ生産農業等19軒。

3. 調査の期日

調査は、事前、現地、事後に分けて次の通り実施した。

- a) 事前調査 昭和59年7月28日
- b) 現地調査 昭和59年8月7日～9日
- c) 事後調査 昭和59年8月10日～20日

4. 調査の方法

調査は本明・久米らが小学生1,258名の結果をもとに標準化した「生活指導診断検査」⁵⁾「DTGS」を用い、それを補うためアンケート調査、感想文等を用いた。

5. 調査の回収状況

いずれの調査も回収率は100%であった。

IV 生活体験内容

生活体験内容は、受け入れ農家によって異なるため、毎日の体験内容調査で得た資料をKJ法によって分類し、体験内容を百分率で示した。(表2)

表2 農村生活体験内容

	9 1.7 %	1 0 0 %
農 作 業 体 験		
酪 農 体 験	4 0.0	7 8.3
しいたけ作業体験	7 3.3	5 6.7
林 業 体 験	1 0.0	3 1.7
手 伝 い	2 8.3	8.3
遊び } 自然の中で	7 1.7	5 5.0
	そ の 他	4 0.0
そ の 他 の 体 験	1 0.0	6.7

V 農村生活体験の指導システム

生活体験内容は受け入れ民家及びカウンセラーによる直接指導とした。(表2)

- c) 食生活も普段の食内容を体験させてください。
- d) 生活態度が好ましくないときは「びしびし」ご指導ください。
- e) 生活の中で子どもたちの実態をカウンセラーにありのままお教えてください。

2. カウンセラー

カウンセラーは地元酪農青年部及び高校生のボランティアによる11名が指導にあたった。

カウンセラーは一日一回、受け入れ農家を訪問し、子どもたちの生活の実態を把握し、本部に持ち帰り、問題となることを指導者会議に提起し、指導方法を検討して再び子どもに返す指導体制をとった。

以上を現地指導の手順の進め方としてシステム化したものが、農村生活体験の指導システムである。

(図1)

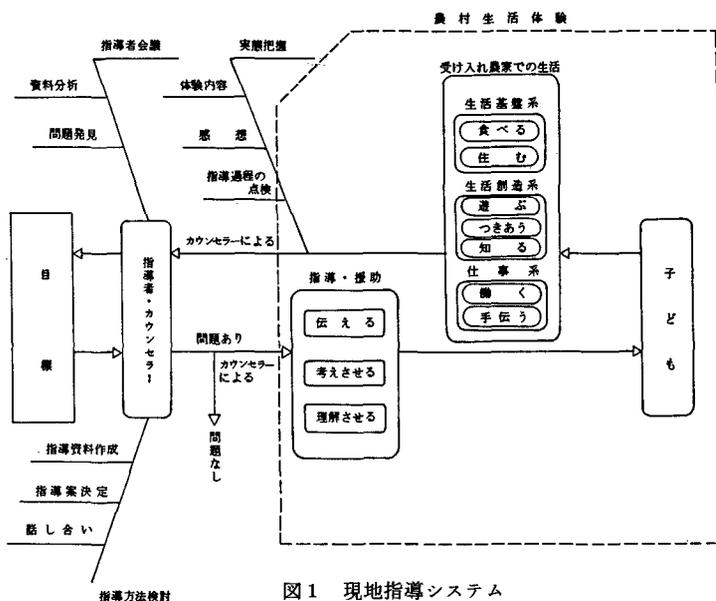


図1 現地指導システム

1. 受け入れ農家

受け入れ農家に対しては事前に打合せ会を持ち、次の点を守っていただくこととし、生活体験をさせてもらった。

- a) 子どもを家族同様に扱い、普段の農村の生活を体験させてください。
- b) 家族と同様に、お手伝い、農作業を毎日体験させてください。

VI 日常生活と農村生活との生活環境状況

1. 労働体験

労働体験を農作業という一現象からみると、経験者と未経験者がいずれも4.83%である。これらの者は、経験、未経験を問わず、実施後「働くことの大変さを感じた」が最も多く58.3%、次いで「楽

しかった」の23.4%、「働くことの大切さを感じた」の20.0%と労働の重要性を感じていることがうかがえる。体験を通して働くことの喜び、大切さを感じることは子どもたちにとって重要な意味を持つであろう。(図2)

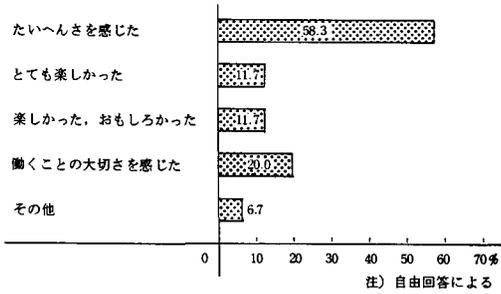


図2 手伝いや仕事について

2. 食体験

図3は矢印が右下に傾いている場合は自分の好みに通りに食べていないことを示し、逆に右上に傾いている場合いる場合は自分の好みに比して実際に食べていることを示している。この図から「ごはん」を始め「野菜」、「魚類」、「たまご」、「くだもの」といった日本型食生活の傾向がみられる。また「コーラやジュース類」「甘い菓子類」「インスタントラーメン」が下降傾向を示しているのは食生活に対する親の配慮が強いものと考えられる。

これに対して現地では「みそ汁」「ごはん」「つけもの」を主体とし、焼魚、のり、トマトやトウモロコシがつけられている。(表3)

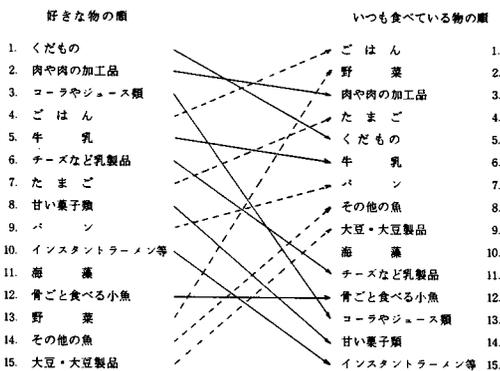


図3 「好きなもの」と「いつも食べているもの」

これは、米を基本とした地域に根ざす農村の食文化の伝統的特性とも考えられる。

このように農家では普段より比較的単調な食事内容であったにもかかわらず、子どもたちは「普段より食欲があった」と答えた者が合計で70.0%もあった。(図4)さらに、農家で食事をしてみて「と

表3 農家での食事内容

日	8月8日		8月9日		8月10日	
	昼	夕	朝	昼	夕	朝
1番	みそ汁	みそ汁	ごはん	ごはん	つけもの	みそ汁
2番	ごはん	ごはん	みそ汁	つけもの	バーベキュー	ごはん
3番	つけもの	サラダ	つけもの	みそ汁	ごはん	つけもの
4番	スイカ、焼魚	つけもの	のり	トマト	みそ汁	のり
5番	トウモロコシ	カレーライス	みそ汁	牛乳	スイカやワリ	カレーライス

注) 多い順に5番目まで。農家19軒の調査による。

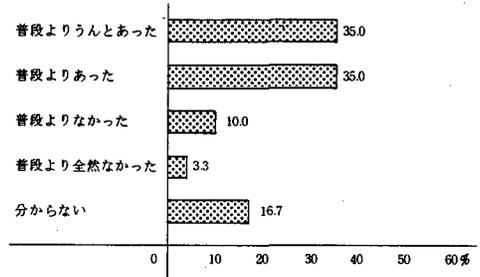


図4 食欲について

てもおいしく感じた」と答えた者が46.7%と最も多かった。(図5)このことは労働を伴った生活の

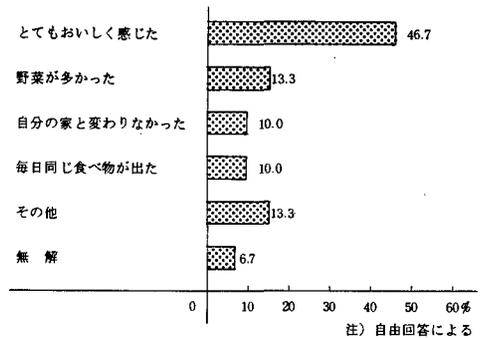


図5 農村の食事について

後の食事であったため、おいしさを感じたのではないかと考えられる。

また、子どもたちは農家での生活を体験して、「食べ物をつくる苦労」「食べることの大切さ」「感謝して食べる」こと等労働体験を通して生産者に対する感謝の心が体験的に理解されたものと考えられる。

(図6)

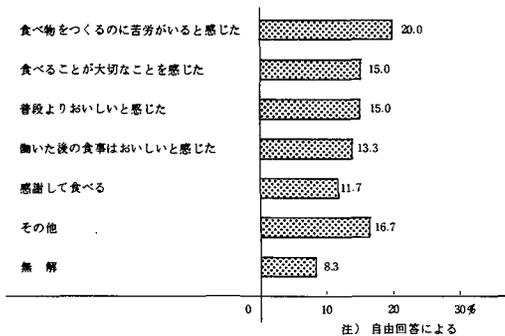


図6 「食べること」について

3. 民宿での生活

子どもたちの生活の基本的な場である家庭では、日常子どもたちはどのような生活をしているのか。五つの生活の基本的な行為を4段階に分けて解答を求めてみると、よくする行為は「ベッドメイキング」「食事のあとかたづけ」「料理のお手伝い」「そうじ」「せんたく」の順となっている。特に「せんたく」は26.7%が全したことがないと答えている。便利な機械に頼れば頼るほど、子供に手伝わせる余地がなくなっているとすれば、生活を維持する基本的な生活習慣として子どもたち実践させることが重要である。(図7)

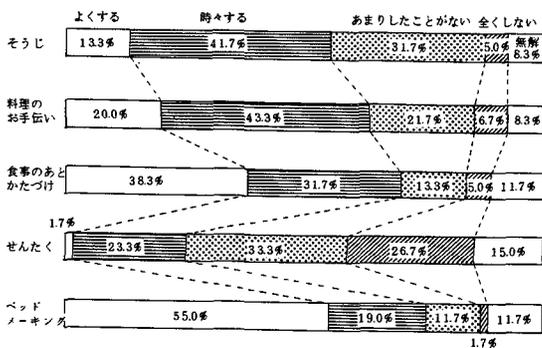


図7 普段していること

このような生活習慣の子どもたちも、家庭や学校の仲間とは異なる参加仲間や農家の人たちと他人に迷惑をかけない生活を基本として行動し、毎日自己をふりかえる指導をした結果図8のとおりである。「難しさ、大変さを感じた」が38.2%で最も多く、次いで「大切さを感じた」30.0%、自己をふりか

えて「いつも迷惑をかけていることが分かった」「自分勝手なことはいけなと感じた」等共同生活の基本となる生活態度が理解されていることがよくわかる。(図8)

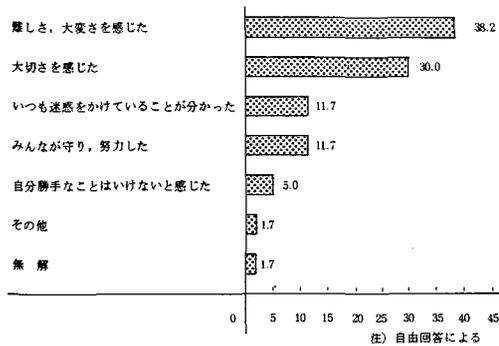


図8 他人に迷惑をかけない生活について

Ⅶ 結果と考察

1. 行動や性格の変化

人間の行動は、日常生活の中で学習されるものであるという考え方に立ち、里美村での体験教育における行動環境や生活環境が、子どもに与える影響を本明、久米らによる「生活指導診断検査法」を用いて明らかにした。検査は、診断項目Aの「基本的な生活習慣」からIの「公共心」までの9項目を事前、事後の2回に亘り実施した。

その結果、身の回りの整理・整頓すること、時間を守る、服装・言語・動作などを適切にし、決まりを守り、禁止されていることをしないで、人に真心をもって接するなどの内容であるA「基本的な生活習慣」と、自分から考え正しいと信ずるところに従ってはっきり意見を述べ行動する。自分で計画し進んで実行するなど人に強制されなくても自分から進んで、他人に左右されずにいろいろなことができる能力をみるB「自主性」と、勤労の意義や尊さを知り、喜んで仕事に奉仕する。正しい目標の実現のためには困難に耐えて最後までねばり強くやり通すという内容のD「勤労意欲・根気強さ」の3項目が、いずれも0.1%水準で有意の差が認められた。評価段階を実数で個別にみると、Cから次第にA段階へと成長の様子がみられるものの、統計的にはこの3項目が有意となった。(表4)

表4 行動及び性格の変化

診断項目	調査時	評価段階																
		C					B					A						
		0	1	2	3	T	2	3	4	5	T	4	5	6	T			
A 基本的な生活習慣	前後	0	1	6	10	17			19	17	36				7	7	※※※	
		0	0	2	3	5			14	19	33				22	22		
B 自主性	前後	0	4	4		8	16	15			31	15	6	21			※※※	
		0	1	3		4	5	4			9	16	31	47				
C 責任感	前後	0	2	7		9	9	15			24	15	12	27				
		1	2	1		4	9	12			21	23	12	35				
D 勤労意欲・根気強さ	前後	0	0	6		6	9	14	16	39			15	15			※※※	
		0	1	0		1	1	9	15	25			34	34				
E 創意工夫	前後	0	3			3	3	12			15	18	14	10	42			
		0	2			2	3	5			8	21	14	15	50			
F 情緒の安定	前後	1	5	5		11	12	12			24	11	14	25				
		1	3	4		8	6	11			17	14	21	35				
G 寛容・協力性	前後	0	1	8		9	10	11			21	18	12	30				
		0	0	3		3	6	10			16	15	26	41				
H 公正	前後	2	3	4	9	18			15	8	23			19	19			
		0	1	3	7	11			9	14	23			26	26			
I 公共心	前後	0	0	1	4	5			8	17	25			30	30			
		0	0	3	0	3			11	15	26			31	31			

注) ※※※0.1%水準で有意

2. 全体評価

子どもにとっては里美村での生活の全てが新しい体験で、作文をKJ法によって集約すると「この体験は短かったけれど、いろいろのことを知ることができ、毎日がとても楽しく良かったと思うし、一生の思い出になると思う」とまとめられる。

ちなみに一番よかったことを自由回答法できいてみると、「農村で生活できた(仕事)」「人間関係(仲間ができたこと)」がいずれも21.7%で最も多く、次いで具体的な体験内容の「したいけとりができた」11.7%、「牛の世話、乳しぼりができた」8.3%や農村生活を体験することにより「農村生活が理解できた」8.3%などの順となっている。(図9)

また、保護者の立場から参加させてよかったことをきいてみると、子どもと同様に「農家の生活が体

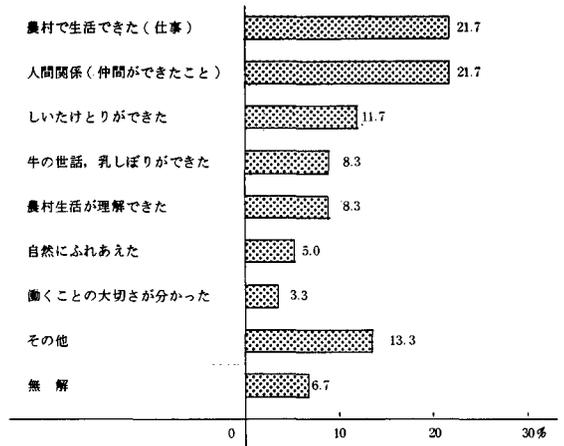


図9 参加して一番よかったこと

験できた」ことが最も多く、生活全体をよかったとしている。多い順にみると、「地元の人の人情の厚さを知ったこと」29.9%、「農家の仕事の苦勞、労働の大切さ、楽しさを知ったこと」28.3%、「人間的な成長が感じられたこと」16.7%などの順になっている。(図10) また、体験のさせ方や食事のこと、健康のことを心配していたのに「思っていたほど大変ではなかった」と答えた人が多かった。

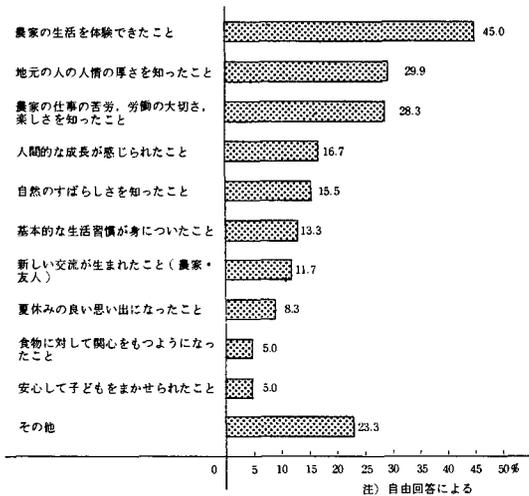


図10 参加させてよかったこと

VIII 結 論

子どもたちの都市生活と農村生活との違いは次のように集約される。

1. 農作業を全員が体験し、労働の大切さを感じている。
2. 食生活は日本型食生活であり、普段より食欲があり、おいしいと感じている。
3. 共同生活から基本的な生活態度が理解されている。

以上のように日常生活とは異った生活体験を通して、行動及び性格の変化を「生活指導診断検査法」を用いて測定した。すると「基本的な生活習慣」「自主性」「勤勞意欲・根氣強さ」の項目に、体験の前後で有意な得点の伸びがみられた。

これは農村生活体験が子どもたちの基本的な生活習

慣を体得するのに有効な活動であることを示すものである。

IX 今後の課題

調査結果をみると、理論的にかなり重複したところや大分異なった側面を調査している個所がある。従って、個々の概念を検討し、概念間の関連を調べ、体系的に整理すべきである。

得られたデータは子どもの農村生活体験の状況を把握し、分析するのに役立ってはいるが、サンプル数が少ないのが問題である。

以上の反省をもとに今後は農村生活の日常生活とは異なったどの側面が子どもに影響を与えているのか明らかにしていきたい。

引用文献

- 1) C・E・Silberman：教室の危機、上(山本正訳)136、サイマル出版社：東京(1973)
- 2) 今野喜清・柴田義松：教育課程の理論と構造、初版。4-6、学習研究社：東京(1981)
- 3) 宮下桂治：我国における野外教育の歴史的考察、順天堂大学体育学部紀要、104、(1977)
- 4) 松本作衛：第三の波にのる新しい農業と農村、143、農林統計協会：東京(1979)
- 5) 本明寛・久米稔：生活指導診断検査解説、金子書房：東京(1977)